

C O R R E N T E

Centro Culturale Italo-Giapponese

ローマで双子育児②

浅田 朋子

イタリアでは毎年 4~5 月に入ると、夏のバカンスをどう過ごすのかという話題が多くなる。

2020 年は新型コロナウイルス感染症の世界的大流行でバカンスどころではなかったが、去年の夏前に EU 圏内は COVID-19 グリーン証明書(ワクチン接種証明、治癒証明、陰性証明)で出入りが可能になった。COVID-19 グリーン証明書があれば EU 圏内はどこでも入国できる！ということで、多くの人が夏のバカンス前までに 2 回目のワクチンを接種した。

2022 年の春からは、イタリア国内では COVID-19 グリーン証明書の提示やマスク着用の義務も原則撤廃され(公共交通機関や医療機関など、一部残る部分もあり)、また屋内での規制も撤廃された。

街には何年かぶりに自由な活気が戻り、レストランやバーは大賑わいである。人々は大声で話し、心から笑った。

今年は私も日本行きチケットを予約した。日本の水際対策のため、イタリア出国 72 時間前の陰性証明書はまだ必要だが、待機期間や空港での PCR 検査がなくなり、少しずつ入国制限も緩和されてきた。しかし各国の水際対策は感染状況を鑑み、とても変更が多い。

日本に帰ると決めてから、日本の水際対策の変更にピリピリし「あ~もう! なんやねん!! まだどうか!」と、ちまちま変わる日本の措置にイライラさせられていたとき、イタリアの保健省の出入

国制限措置のページで変更点がないか確認していたら、なんだかいつもと雰囲気が違う。「あれ、なんか文章が短くなってないか..?」とよく見ると、なんと「Dal 1° giugno 2022 la certificazione verde Covid-19 non è più necessaria per l'ingresso in Italia dai Paesi dell'Unione Europea e da Stati Terzi.」と書かれている。「2022 年の 6 月 1 日から EU 圏内、またそれ以外の国からのイタリア入国にグリーン証明書は要りませんよ~」と言っているではないか! コロナ前の通常の出入国に戻ったのである。バカンスを見越してのスパッとした決断..。イタリアのこの切り替えの速さ。今までの道のりがあったからこそその判断であろうと思う。それにひきかえ、なかなか緩和されない日本の入国制限には大きなため息が出た。

双子の通う小学校の親たちも、今年はようやく例年のようにバカンスの話題をウキウキと始めた。

「あ~、やっと心置きなく海外に行けるわあ~! ちょっと、私、今年こそは日本に行こうかな~と思ってるんだけど、うふふ~ん」と去年は海外旅行を諦めていたお母さんが嬉しそうに私に聞いてきた。「あ、日本入国には陰性証明書いるけど..」という、「あ~大丈夫、大丈夫。ワクチン接種証明書あるから!」あのね、日本はまだワクチン接種証明書だけでは入国できないんですよ。陰性証明書が必要やねん」と言うと、「はあ!? 何そ

れ！ワクチン証明書あるのに！！何で陰性証明書なんているの！？」とすごい剣幕で怒り出した。

「ついでに言うと観光ビザも。あと、旅行会社の団体旅行じゃないとダメやで。」「話にならんわ・・・」とお母さんはムスっとしている。すると他のお父さんが「あ～それね、うちの弟が今年の夏に新婚旅行で日本行く予定してたのに、まだ陰性証明書とかいろいろ規制あるからって旅行をやめたよ・・・。ドラギ(イタリアの首相)も日本は足並み揃えんって怒ってたで～」と加わってきた。「日本ってさ～、どうなってるの？いつまで入国制限続けるつもり？！」知らんやん・・・岸田総理に聞いてくれ。それより何よりイタリア人のリサーチ能力の低さよ。あんたたち、そんなに日本に行きたいんなら、日本大使館のホームページにイタリア語で説明してあるからきっちり読んでくれよと言いたくなる。しかし彼らのこと、そんな制限がまだあるなら「ま、また今度でいいか」とあっさり諦めるのだ。

さて、私は諦めるわけにはいかないの、日本の厚生労働省の水際対策のページを何度も読み、在イタリア日本大使館にも問い合わせ、ついにはイタリアから厚生労働省まで電話をかけた。海外在住経験もあり外資系会社で働く姉にも相談の電話をして「いろいろ調べてるけど、心配やねん・・・」と泣き言をいうと、「は～」とため息をつかれ、「あんたの、その石橋を叩いて叩いて叩きすぎる性格、どうにかならん？」と呆れられた。

また、嫌がる夫に無理やりイタリアの保健省や航空会社に電話をさせ、きっと誰も気にしないであろう小さなことまで細々と確認させた。「君のいう通りに問い合わせると、大体、その質問の意図がイタリア人には伝わらないんだよ、細かすぎて。だから相手にイライラされるんだ・・・」と夫は半泣きである。「あのね、あんたの国やねん。母国語だろう！？説明できなくてどうする？負けるな、がんばれ！」という、「僕にイタリア語できっちり説明できているのに、どうして自分で電話かけないんだよ・・・」と小さな声で嫌味を言ってくる。双子への小さな頃からの刷り込みで「イタリア語が母語ではないママをパパが積極的に助けるべし！」と考えている双子がそれを聞き、「パパ悪い！！ママかわいそう！私たち、日本に帰れなくなる！！」と非難し、夫は悲しそうにうつむいている。実際に

は夫に頼らなくても電話くらいできるのだが、カスタマーサービスとは名ばかりの、知識もやる気もないイタリア人と電話で喋るとかなりイライラさせられるので、これ以上日本行き準備でストレスを抱えたくないのである。



【PCR 検査後にお気に入りのパールへ】

そして何よりも一番の問題が陰性証明書である。陰性証明書は任意の様式でも良いが、問題が起こりやすいので厚生労働省のフォーマットを使用し、PCR 検査は以前双子が検査を受けに行ったことのあるクリニックで陰性証明書を出してもらうことにした。この2年ほど、双子は学校のクラスでコロナウイルス感染者が出るとその度に検査をしていた。この検査は鼻から細長い綿棒を鼻咽頭まで入れられるので、大人でも痛くて辛いものである。双子も本当に嫌がっていた。学校の親たちも「この検査をさせるのが本当にかわいそうではない。どうにかならんものか」と皆暗い顔で言っていた。

しかし日本に行くにはこの検査をするしかない。日本では唾液も有効な検体として認められているが、イタリアでは唾液検査は正式な陰性証明書を出すための有効な検査に認められておらず、ローマのクリニックで唾液検査のみで正式な陰性証

明を出してくれるところを私は見つけられなかった。

「また、あの鼻の検査しないといけないんだけど、ごめんね…」と双子に言うと、「日本に行くためだから、頑張る」と健気なことを言う。「どこですの？」と聞くので、「あの、最後に検査を受けた、家のそばのクリニック」と言うと、「え…あそこ？」と双子は顔を曇らせた。

今年の初めに双子の一人がコロナに感染し、このクリニックでPCR検査を受けた。すでに小児科でクイック検査をして「ほぼ陽性」と診断されていたが、念のためPCR検査を受けてくれと医師に言われ、すぐそばにあるこのクリニックに再度PCR検査を受けに行ったのである。

検査はクリニックの敷地内の屋外仮設テントで行われる。私たちが検査を待っていると小さな子供を連れた人が続々と来る。娘はもうクイック検査をつい先ほどしているので「やりたくない！」と鼻を押さえて泣いている。検査をする看護師は若い男性で、嫌がる娘を見てすでに顔色が変わり、とても不安そうである。「お母さん…体を押さえてもらえますか？」と震える声で懇願され、暴れる娘を無理やり押さえた。娘のあまりの嫌がりように看護師はおろおろしている。「ご、ごめんね…すぐ終わるからね…。終わったらアメをあげるからね…」「アメなんかいらないうー！！」イタリアの定番、子供アメ作戦は見事失敗である。意を決し若い看護師は震える手でそっと綿棒を入れた。その途端「ぎゃーっ！！！」と火がついたように娘が泣き出したかと思うと、鼻血が吹き出した。看護師の白衣と娘の服に飛び散る血。私たちの後ろで検査待ちをしていた子供たちや親も「うわああああ！！」「血だああ！！！」と騒ぎ出し、子供たちはギャアギャアと泣き出した。まさに地獄絵図…。クリニックの中から騒ぎを聞いた医師が飛び出してきて「ちょっと！！何があったの！？」と看護師を責めると、顔面蒼白で血だらけの綿棒を持つ看護師は呆然と「…検査をしただけなんです」とうなだれた。

と、こんな出来事があったので、このクリニックに双子は良い印象を持っていないのである。しかし元はと言えばクリニックに行く前に、小児科の先生がかなり強引に鼻の検査をしたので、すでに少

し鼻血が出ていたのである。まるで虐待したかのような責められ方をした可哀なクリニックの看護師さん…。

しかし今回のPCR検査はベテランの看護師さんで、アメ作戦も成功。双子も頑張って動かずじっとしていたので、すんなりと検査ができた。もらったアメをペロペロ舐めながら「日本行くのが楽しみだね！」と満面の笑顔であった。

様々な問題を乗り越え、ようやくフィウミチーノ空港までたどり着き、チェックインカウンターで用意してきた全ての書類をベテランスタッフのおばさんがチェックをしている時にまた不安になり「問題なく日本に帰れるのかな…」とつぶやくと、おばさんが「何を言っているの！あなたは日本人でしょ。自分の国、日本に帰れないわけがないわ。大丈夫、あなたは帰るべきですよ。Buon viaggio! さあ、行ってきなさい！」と大きな笑顔で力強くチケットを握らせてくれた。

今まで当たり前のように日本とイタリアを行き来していたので、自分の国に帰ることが困難になるなんて想像したこともなかった。今回のパンデミックで「外国に永住する、自国を離れる」ということを深く自覚させられたとともに、以前のように行き来できる世界に早く戻ってほしいと心から願う。



【関空に着き、入国審査へ向かう】

(元当館語学受講生)

よかれと思ってやりがちな 攻撃行動を回避せよ

竹田 理乃

「あなたは美人じゃないんだよって、どんな風に教えてあげればいいものなのかな。」

職場の隣席からこんなお悩みが聞こえてきたとき、私の顔には「葉綱と悲劇の仮面」のモザイクに描かれた仮面そっくりの表情が浮かんでいたことでしょう。ちょっと前まで京都市京セラ美術館で開催されていた「ポンペイ展」でご覧になった方も多いはず。

ため息まじりにお悩みを打ち明けてくれた同僚は、礼儀正しく、思いやりがある好人物です。発表会に向けてピアノの練習に勤しむ娘さんについて語る口調は温かく、いよいよ衣装選びが始まるとなれば、きっと午後の業務への活力になるようなすてきなエピソードがあることだろうと待ち構えていたら、飛び出してきたのは冒頭のひと言。ロマンチックな濃いグレーのワンピースがよく似合う颯爽としたご婦人である彼女をして、かわいいお子さんに余計なことを言わしめんとするのだから、身内への愛情の空回りって恐ろしいものです。

ある夏休みの朝、私も「じいじに似て頭がいいが、女の子としては顔がマズい」と教えてもらったことがあります。祖父としてはフレーズの前半に重きを置き、せっかく賢いのでからちゃらちゃら遊び惚けずしっかりお勉強なさいと言いたかったのでしょう。祖父の期待は嬉しかったので、私なりによくお勉強したつもりです。

ついでにフレーズの後半についても得難い忠告として心に刻み、以後は身を慎んで、ごっこ遊びのお姫さま役を辞退したり、いじめっ子が丸顔をからかってタマネギと呼んできても甘んじて受け入れたり、卑屈な努力を重ねました。今になって思えば、そんな努力はするべきじゃなかった。成人式の関連イベントを断固として拒否して、両親が振袖のために用意してくれたお金で人生初

の海外旅行に赴いたのは、どうしてもイタリアに行きたかったからでもあり、身のほども知らずに着飾って恥をかくのが嫌だったからでもあります。

娘さんに「あなたは美人じゃないんだよ」と教えてあげたい理由を同僚に訊ねてみたところ、発表会の衣装として選びたがるドレスのデザインが、おとなの目には不相応に見えるからなのだとのこと。悪目立ちしてイジメに遭うのではないかと心配する親心は理解できます。しかしながら、医者が不老長寿の妙薬だと信じて処方しても、水銀を服用した患者は中毒死します。愛情からの発言であっても、内容がすべてです。



【「葉綱と悲劇の仮面」ポンペイ展ポスターより】

出典：<https://pompeii2022.jp/>

いや、でもさア。似合う似合わない、向き不向きってあるじゃないですか。子ども相手だからって、そこから目をそらして無責任にチャホヤするのって、なんか違うんじゃないかなア。自分だってイエローベース春タイプの色は似合わないって自覚しててでしょ？

自分のなかのいじめっ子がこんな風に反論をしてくる声心が心の中から聞こえてきますが、ここは子どもたちの健やかな成長を願って、数々の名著を書き残してくださったジャンニ・ロダーリ先生のお言葉を借りて対抗しておきましょう。

未来はおとぎ話の世界ほどすばらしいものではないことはわたしも承知している。だがそんなことは問題ではない。ただ人生に立ち向か

っていくに当たって、楽観主義と信頼とを子どもはたくわえておくことが必要なのである。それに、ユートピアの教育的価値もなおざりにはできない。よりよき世界に希望をもつのでなければ、誰が子どもを歯医者のところへなど行かせるだろうか。

これは創作の手引きとして紹介されることの多い『ファンタジーの文法』というエッセイの33章「主人公としての子ども」にある、親子のあいだに発生するお話あそびの効用を説明したくだりです。

お話あそびで子どもの相手をするにあたって、反省を促すように〈カルレットは、お塩をひっくり返したり……ミルクを飲むのをいやがったり……ねんねがきらいな子でした〉と欠点を数え上げるよりも、好ましい自分の未来を夢想できるように〈カルレットは靴屋さんで、世界でいちばん美しい靴をつくりました。カルレットは技師で、世界でいちばん長く、いちばん高く、いちばん頑丈な橋をつくりました〉と語ってあげた方がいい。たとえカルレットが難しい子だったとしても、孫娘の顔がマズかったとしても、そんな一面を強調して脅迫することはありません。どんな色が似合うのか実験してみようと思うには、きっと自分にぴったりの色があるはずだという前向きな発想が養われている必要があります。それ以前の段階で、子ども相手に「あなたにかわいい色は似合わない」だなんて言っては先がありません。

私が自分のイメージに平静でいられるようになったのは、イタリア留学中のことです。顔面の構造に変化なし、美食の街ボローニャの魔力に負けて体重はむしろ増加、相変わらずの金欠で美容費の少なさも相変わらず。変化したのは褒められ慣れたことの一点のみ。わざわざ留学の成果として発表せずともよさそうなものですが、転地療養が効いて元気になったと思えば、朗報として同じ毒に蝕まれた人へ周知してみたくもなります。

教室に入った瞬間に先生が投げかけてくれる「チャオ、ベツラ」から始まり、パールのおばちゃんは「私の宝石ちゃん」を抱きしめようと待ち構えてくれていて、お総菜屋さんは「今日も輝いてるね、元気？」と手を握ってくれ、パン屋さんは「俺の日

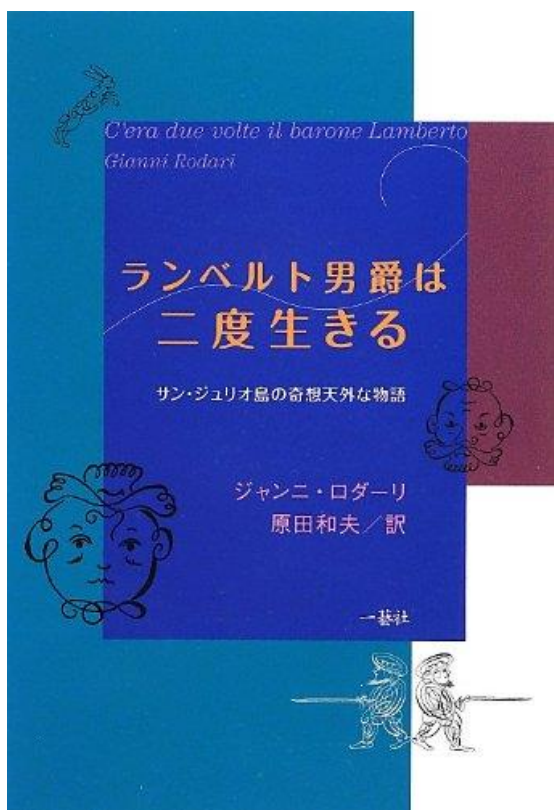
本人学生に今日はどんないいことがあったのか聞かせてくれないことにはなにも売らない」と言い張る。優しい言葉を浴び過ぎて心が不安定になり、ふと大家さんに「私は美しくありません」と言い返してみたところ、ものすごい目付きで「きみの部屋には2枚も鏡を置いているのに、なんでそんなこと言うんだ。毎日、出かける前に鏡の前でにこっと笑うようにしなさい。じきに分かるから」と厳命されました。ちょっと自分を貶めてバランスを取りたかったのですが、あれは大失敗だったと今でも反省しています。

ちなみに大家さんに促された通り、鏡に向かって毎日にこっとやっていたら、笑顔の作り方がだいぶ上達しました。大学の就活イベントで「自分の不得意なことを親しい人に指摘してもらいましょう」と宿題を出され、十年來の友人に意見を求めたところ、一瞬で届いた返信メールに「笑い方が下手くそ」と書かれていたことを思うと、大金星です。今なら祖父に顔のマズさを心配されても、すっ呆けて「ソフィア・ローレンと比べられても困りません」くらいのことは言い返せそう。晴れ着を嫌がって大陸の向こう側まで逃げていたような人間がここまで回復したのですから、ひとつの言語を習得できるほどの時間とお金と努力を費やした甲斐があったというものです。

ロダリーの晩年の作品に、彼の故郷オルタ湖を舞台とした小説『ランベルト男爵は二度生きる』があります。主人公のランベルト男爵は御年92歳の富豪。世界各国に大きな影響力を持つ財界の傑物なのですが、高齢と病苦から半死半生のありさまでサン・ジュリオ島に所有する豪邸に隠棲しています。そんな彼が魔法の力で若返り、老いぼれから遺産を筆り取れる日を心待ちにしている残忍な甥っ子や、血なまぐさい仕事は慣れっこの盗賊団などの悪党たちとの攻防を繰り広げる、どなたにでもお薦めしやすい愉快な印象のお話です。

明朗でたくましいランベルト青年が悪党どもを翻弄するくだりが気持ちよく、この作品に初めて目を通していたときの私は、当たり前のように勧善懲悪で幕が降りるのを期待していました。ところがロダリーはありきたりなところでは立ち止まりま

せん。ランベルトのために用意されたハッピーエンドは、悪党たちが財産を狙って動き出すよりずっと前から蝕まれていた、心身の自由でした。



【『ランベルト男爵は二度生きる』】

出典:<https://www.amazon.co.jp/>

冒頭で描かれるランベルト老人は、自分がどんなに弱った状態なのかをひっきりなしに確認させて悦に入っていました。悪党たちとの攻防に決着をつけたランベルト青年は、まるで規則でもあるかのように作中唯一の若く美しい女性登場人物への求婚を開始します。そこからもう一息、ランベルトが自身の肉体的な弱さへの執着を断ち切り、おとぎ話世界の求める行動規範に反した決定を下せるようになってようやく、ずっと彼を縛っていた抑圧の存在が明らかになるクライマックスは刺激的です。

『ランベルト』のエピローグに、ロダリーは生誕地オメーニャの格言〈ニゴリア川はさかのぼる、法はわれらが作る〉を引用しました。オルタ湖を発してアルプスの山々へ向かうニゴリア川の水は、反骨の象徴です。意気揚々とサン・ジュリオ島を後

にしたランベルト少年を道連れに、読者も重しを落として足取り軽く歩いて行けるようになったと知れば、ロダリー先生もお喜びになることでしょう。



【サン・ジュリオ島】

出典:<http://www.comune.ortasangiulio.no.it/Home/Guida-al-paese?IDPagina=35381>

＜参考文献＞

Rodari Gianni, *C'era due volte il barone Lambertino*, Einaudi Ragazzi, 2009

『ファンタジーの文法』ジャンニ・ロダリー、窪田富男訳、筑摩書房、1990

『ランベルト男爵は二度生きる』ジャンニ・ロダリー、原田和夫訳、一藝社、2012

(元当館語学講師)

＜オンラインレッスン随時受付中＞

zoom を使用したマンツーマン(1対1)のオンラインレッスン。多くの方にご利用頂いています。



編集・発行 / (公財) 日本イタリア会館
〒606-8302 京都市左京区吉田牛の宮町 4
TEL: (075) 761-4356/FAX: (075) 761-4357
E-mail: centro@italiakaikan.jp
URL: <http://italiakaikan.jp/>